

## 舞踊学の新しい方法を探る

柴 眞理子

今回のシンポジウムは、「われわれにとって舞踊とは何か」の第9回にあたり、「舞踊学の新しい方法を探る」というテーマで行われた。従来のシンポジウムでは、石井漠、小寺融吉、江口隆哉らを取り上げ、先人たちの事績を通して、われわれにとっての舞踊を考えるという一つの傾向があったのだが、今回は、このような人物史とは違った視点からの舞踊学研究をとりあげることになった。舞踊の研究には、美学的、社会学的、教育学的、人類学的、生理学的、などいろいろなアプローチの仕方があるのだが、2時間という限られた時間の中では、そう多くを対象にできないので、今回は、諸外国での舞踊学研究の実態の紹介も兼ねて、パネラーには、外国での研究生活を体験なさった三人の先生をお迎えした。

シンポジウムは、司会として柴が加わり、パネラーの三人の先生に、それぞれ留学なさった国の舞踊学研究の実態と、現在お考えになっていらっしゃることをお話いただき、その後、フロアから質問を受けるという形で進められた。その内容については、パネラーの先生方が、個別に原稿にまとめて報告して下さっているもので、ここでは、先生方の紹介と、シンポジウムの最後に先生方からいただいた一言を紹介することにしたい。

大貫秀明氏は、1975年から1978年までイギリスのラバンセンターで学び、1979年にロンドン大学で修士号を取得、その後、1979年から1981年までニューヨークのダンス・ノーテーション・ビューローで研究を続けると共に、ラバンの流れを汲むハンヤホルム、アルビンニコライの下で実技面の研修をされた。今回は「舞踊教育における知」と題する報告が行われた。

外山紀久子氏は、1986年から1988年までニューヨーク大学でPerformance studiesを専攻し、「Meta-dance or Dance as Deconstruction」というテーマで修士号を取得、その後、フランクリン・ファネス美術研究所で美術史を学ばれた。1993年3月には、「舞踊におけるモダニズム・ポストモダニズム」というテーマで東京大学で博士号を取得。美学からの舞踊へのアプローチは、文化事象における包括的な視点をめざす立場に立てると述べられ、その立場に立った舞踊の研究方法について報告された。

渡辺知也氏は、1965年から1971年まで、ウィーン大学演劇学研究科で学び、「ヨーロッパ演劇史」

というテーマで博士号を取得、その後、ウィーンブルック劇場や旧東ドイツの民衆舞台で演出助手、文芸部員を務め、1983年に帰国。今回は演劇をつくる立場から、舞踊をも含めて演劇が抱えている問題について報告が行われた。

以上のようなパネラーの報告を受けて、フロアから2、3の質問が出された後、松本千代栄副会長から感想とお礼が述べられ、更にパネラーの先生方に「今後、舞踊学会でどのようなシンポジウムを企画したらよいか、ヒントをいただきたい」と提案された。これに対し、各パネラーからは、次のような発言がなされた。

渡辺氏——私は、実際に舞台を作る立場で物を考えている。どういうふうにしたら一人でも多くのお客さんがきてくれるか、それからせつかく来てくれたのだから、手ぶらで帰すわけにはいかない。それなりの物をこちらから提供しなければいけない。その関係を非常に緊密にしていくことで、「ああ、演劇っていうものはおもしろいものだ」という認識が広がっていく。現にそのような形でこれまで、山本富士子も杉良太郎も含めて成功している。だから大衆演劇、あるいは商業演劇というその柵を取り除いたレベルで考えて創作していく必要がある。もう一つは、祭の時のエネルギー、あれがやっぱり一番根源的なものだと思う。いつになってもその要素だけは失われていないはずであるから、それにもう一度近づくと、それをもう一度お蔵から出して使って見るということ皆さんで考えてみてはどうか。

外山氏——シンポジウムのような場で何か実りのあるものを行うには、シンポジウム自体は意義のあるものだと考えるが、どういうテーマをみつけるか、パネラーにどういう人間を呼ぶかということが大きく関わってくると思う。今回のように、例えば、方法ということから入るのも一つのやり方だと思うが、或いはもっと非常に具体的なものとか、その年に非常に話題になった舞踊でもよいのだが、そういうとっかかりから入っていくのも一つのやり方かなと思う。

大貫氏——舞踊学会の会員の方はどこかにメインを抱えていて、ここに入っている方が多いのではないか。それを集約するのはなかなか難しいのかもしれないし、それが舞踊なのかもしれない。私はこれでいいと思うが、会員の熱意を喚起したい。

以上のように、今回のシンポジウムは、三人のパネラーが異なる立場から、舞踊について現実の状況の中からのどのように研究対象を把握していくのか、また諸外国ではどのようにその研究を進めようとしているのかを報告された。今回のシンポジウムの内容を刺激と受け止め、熱意をもって研究に取り組み、学会で積極的に発表をしていくことの必要性を痛感してシンポジウムを終えた。